

松下幸之助記念財団教員フェローシップ 報告書

被災した干潟の生きもの調査 東日本グリーン復興モニタリングプロジェクト

株式会社小樽水族館公社

加藤健司

1. 調査での気づき

自然環境のモニタリングは環境変動を把握するために重要である。本調査は被災後の自然環境を把握する方法として、参加者が発見した種数で多様性と希少性を評価している。発見した種とその数にどのような意味があるのか（普通種か希少種か、過去とどう違うか、生息環境は変化しているか）を知ることで、身近な自然の見え方が変わり、自然環境への関心を増すきっかけとなることに気づいた。この気づきを活かすために、おたる水族館構内の海岸で例年実施している「磯の生物観察会」において、発見種に着目した解説を行うことを考えた。

2. 調査内容で得た知識を応用した観察会実施の概要

2017年7月28～30日の3日間（定員各日10名）で小学校1～4年生を対象とし、海岸での生物採集や形態・行動の観察、海藻標本の作製を行う観察会を実施した。

本調査と関連する生物採集について、観察会での発見総種数は11種（カニ類2種、ヤドカリ類3種、貝類4種、ヒトデ類1種、魚類1種）であった。いずれの種も水族館職員が把握している普通種であり、ヒトデ類と魚類、ヤドカリ類1種を除き、参加者のほとんどが発見していた。

その後の解説では対象学年を考慮した上で、複数種が発見されたカニ類とヤドカリ類、貝類を用いて、種の違いについて扱った。中でも子どもたちの関心が高かったカニ類とヤドカリ類について種を見ると、イソガニとヒライソガニ、ホンヤドカリとケアシホンヤドカリ、ヨモギホンヤドカリが発見されており、単なるカニとヤドカリではなく身近な海岸だけでも複数種がいることを伝えた。さらに発見者が少なかったヨモギホンヤドカリは、その生態（近年新種記載された種で夏期に休眠するため見つけにくい）を解説することで、種の違いだけでなく生態の違いを伝える機会となった。

3. 観察会実施時の子どもたちの反応や感想

自然体験の経験が多いか少ないか参加者によって違いがあったものの、それぞれが活発に多くの生物を採集していた。転石裏の素早いカニ類を捕まえる子どもや、魚を必死に追いかける子ども、模様が異なる貝類を見つける子どもなど、興味の行方が様々で楽しみながら採集していた。私が最も驚いたのは、転石表面にいる貝類を見逃していた子どもが、動くヤドカリを捕まえて貝殻を認識したのち、飛躍的に貝類を見つけられるようになったことである。当人も多くの生物に気づき興奮している様子であった。

4. 観察会を実施した感想

海水浴できる時期が短く、低干満差なため磯が少ない北海道において、膝下まで海に入って生き物を探す観察会は生物に触れる良い機会である。何よりも子どもたちが楽しんでいたことが一番で、私たち飼育員は各自の興味を広げる少しの手助けをしたに過ぎない。好奇心が大きくなって、今度は違う海に行く、それとも山に行ってみる、子どもたちの視野が広がり次の発見へと繋がれば嬉しく思う。

5. 自身の体験を語ることによる子どもたちの学びへの影響について

今回の観察会は小学生が対象のため、モニタリングとしての機能を果たすことではなく、近年の教育課題である自然体験を充実させることに大きく寄与できると思う。この体験がきっかけとなって子どもたちが自然環境に目を向け、彼らの将来の持続可能な社会を考える一助になれば幸いである。



干潟調査の様子



磯の生物観察会での生物採集



解説の様子